

シャーマニズムと音楽についての考察

野 田 燎

はじめに

シャーマンとしてのユタが、依頼客の悩みや様々な問題を解決するために神の託宣を願う。それをウクイ（御声）として、ユタは自らが唄う歌にのせて語る。その歌や音楽を如何にして身につけたのか、何時、何処で覚えたのかを知ることは大変興味がある。なぜなら、音楽の持つ人と人とのコミュニケーションのあり方や、人を癒す音楽の作用を解明する意味からも、大変重要だと考えるからである。

そこで、沖縄県宮古島に住むユタ、N.T.のユタになるまでの成巫過程と音楽環境を調査しつつ、音楽の人に及ぼす心理的・生理的影響と、そこから生み出す治癒力の原点を探りたい。

1. シャーマンとしてのユタ

「シャーマン」(Shaman)の語源はツングース語の「サマン」(saman)から使用され、広く知られるようになり、サマンと共通の観念や行為を行う者をシャーマンと呼ぶようになった。シャーマニズムの研究者、桜井徳太郎によれば、『超自然的存在または領域と直接交流できる能力を有する呪術-宗教的職能者一般』^{註1)}を意味する包括的な語として、「シャーマン」を位置付けている。なぜなら、東北、北アジアのサマンこそ真正かつ典型的なシャーマニズムと見る考えのみでは、他の現象を特殊なも

のと捉えてしまう可能性があるからである。また、シャーマニズムを研究する場合、様々な形態を持つ宗教的職能者を果たしてシャーマンか否かと問う行為は無意味でもあり、『問題は超自然的領域または存在との直接交流の仕方にある』^{註2)}と桜井は指摘している。

シャーマンの現象や特徴を調べると、憑霊型と脱魂型の二つの分類ができる。その一つ脱魂型をシャーマニズムの典型的特徴だと考える代表者は、M. エリアーデ(M. Eliade)である。彼によると『トランス状態のあいだにシャーマンの霊魂がその肉体を脱し、天上へ上昇し地下へ下降するために空間を飛行すると信じている事柄をさす。シャーマンは、このような神秘的な空中飛行をイニシエーション(入巫)の際に初めて経験するが、その後の巫術実修の際にも容易にトランス状態に入り、宇宙の天空を訪問しては、持参の供犠動物の霊魂を神々に献げてその恩寵をもとめる。あるいはまた死者の霊魂を地下の冥界へ届けるために下降して地中に潜入する。そうして神霊の命令や死霊の声を、人々に伝達する役割を果たす。』^{註3)}これをエクスタシー＝脱魂説と呼ぶ。

他方、憑霊型を示す代表者として、J.A.マッカロック(J. A. MacCulloch)がおり、『元来、シャーマンの役割は治療とト占を主とするが、それはシャーマンが超自然的世界との密接な関係を結ぶことによって効力をあらわすものだとみる。つまりいくらかの精霊が彼を助け、その身体に憑依し、彼の命令に従って機能するわけである。このようにシャーマンは諸精霊と肉体的にも精神的にも直接に交通し、実際に霊界へ接近することができる。そ

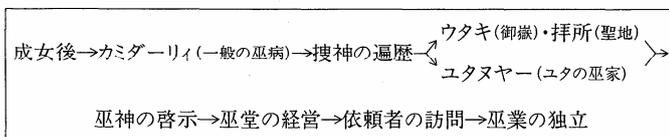
うして通常の間人よりもすぐれた知識や能力を獲得し、それによって敵対的な精霊や呪力を制圧し駆逐する。こうした能力を行使しているあいだ、シャーマンは明らかに平常とは異なった精神状態におかれている。』このマツカロックの考え方はエクスタシー＝脱魂型を含む、^{註4)}ポセッション＝憑霊型といえる。

私の考えでは、トランス状態を脱魂とみるか、憑霊型と捉えるかという問題より、シャーマンの特性として、ある特殊な経験を通して超自然的世界と交流する方法を身につけ、人々の望む答えを伝えたり、病を治したりする能力を有する者としてみるのが適当と思う。ユタの場合『神懸り』であり、典型的な憑霊型を示しているが、そこに守護霊といったシャーマンにとっての保護霊が外部からやってきて、その身体に憑着して虜にするパターンがあり、加えてその守護霊の導きで天空を飛翔したり海底を泳ぎ、龍宮を訪ねたりするといった脱魂型の要素もあるため、これら二つの混合型がユタといえる。

ユタの成巫過程ではカミダーリ（神障り、神祟り）の発作が起こり、はじめは病気と思ひ医者に通うが原因がわからず、そのうちに幻覚を伴って夢か現実か判らないまま神の使者に出会い、その指示に従ってさまよい歩いたり、食事がとれなくなったり、精神の錯乱状態で踊りだしたり、訳の分からない言葉を話し出したりする。姿の見えぬ神に「助けてほしい」と訴えても、「ユタにならなければ許さない」と脅迫されたりし、ついにユタになる決意をすると、ある日神が姿を現し、巫者になる手ほどきをしてくれる。このことを『カミヌウシラシ』（神のお知らせ）と呼ぶ。これらの経験を通過して初めて、ユタになる条件が整う。

以後、神の託宣を受けるユタとして、宗教的職能者として、依頼者、信者の相談にのる専門家になるが、神の言葉を伝えるユタの信用度は、依頼者の願いが叶えられたか、または適切な指示が与えられ、それによって恩恵を得たかによって決まる。

図1 ユタ成巫過程のパターン



ユタはカミダーリ（巫病的異常状態）を経て神の道に使える人＝ユタになるが、その際、「道あけ」ができるカミダーリは消える。では、いかなる人がカミダーリになるのか。

ユタは先天的に神に選ばれた人として運命づけられ、神の人になったと考えているが、ユタの経歴をみると、往々にして夫婦間の不和、離婚、家族間の争い、貧困、身体虚弱、病気、子供や夫の死亡、事業の失敗、破産、事故など個人の生理的・精神的トラブルと社会的な関わりの中でトラブルが連鎖、複合してカミダーリを起している。

しかし、幼少の頃から霊感が強く、人の死を予言するなど超能力を持つ子供を「サーダカウマリ」（性高生まれ）とか「セジダカイ」（霊高い）と言ひ、将来のユタ候補として親や周囲の人々はみる。子供も周囲の自分を見る目を意識し、「神ごとに敏感な子供」という自負が芽生える。これらユタの体質的な面だけでなく、生活環境や宗教的、文化的意識と伝承されている伝統的側面との関連が、ユタを輩出していると考えられる。

2. 宮古島のユタ(N.T.)の成巫過程

本研究の対象者N. Tは宮古島の平良市に住むユタであり、昭和22年、7人兄弟（4男3女）の長女として生まれ、決して裕福ではなく、家の手伝い、弟や妹の面倒をよくみる優しい姉であった。母は、この長女に「神様はいつでもあなたを天からみているよ、悪いことをしちゃいけないよ」と言っていた。そのため、「いつでも誰かに見られているという意識があった」と話す。

ある意味でカンがよく働き、物事を直感で識る能力を持ち合わせており、兄弟たちを事故から何度も救っている。次男が海に泳ぎに行ったものの心配で海に駆けつけると、案の定、3歳の次男坊が溺れている。弟を持ち上げ、浜に寝かしてお腹を押して、水を口から出させ助けた。この時、先祖神のお爺が「急いで行きなさい」と声をかけたような気がして海に走ったという。また、竜巻が起こったときにも、庭で遊んでいる弟をとっさに抱き上げて家に入り、難を逃れた経験もある。

これらは「虫の知らせ」といったものでは処理できない、靈感めいた神の指示が働くとユタは意識している。

中学生の頃、守護神にもなる白い顎髭のお爺さんに出会い、天にフーッと左手で持ち上げられ、自分の親の姿を見せてくれたと言う。宮古高校定時制に通いながら保母として保育園に勤めたり、日用雑貨店に勤めたりして家計を助け、20歳で結婚したものの、21歳頃からカンツキャギ（神かつぎ）神が憑依して島中を歩き回される状態になり、夢で事故や事件を見てその予言をするようになる。

23歳の冬の事、神様が枕元にたって、「おい、お前の命を奪おうか、それとも狂わせようか」と言ったという。小さいときから神高いと周囲から言われていたのでユタを訪ねるが、五ヶ所まわっても先ほどの神に会えず、その夜から身体が変になり、ゲエゲエと吐くものもないのにつわりの様な状態になり、苦しくなった。家中の神に線香を捧げたものの、身体が激しく身体が震えだし、この時神が乗り移っていた。午前零時から朝の太陽が昇るまで、神様が後ろに立って肩を押さえつけられて、額が地面につくまで何百回も「ごめんない、ごめんなさい」のお願いをさせられた。朝の太陽が昇るときに、「ツツガナス（指導神）のおかげで…」とウクイ（御声）が始まった。これが火の神が私に乗ったときだと言う。

精神病院に自分から出向き、「治療してくれ」と医者に頼むが治らず、かつて病室内で自殺した者の姿が見えたり、自分にしか見えない特殊な能力があることに気付いた。彼女の場合は、自分自身で守護神を見つけ、「道あけ」「口あけ」への過程を進むことになる。「あんたは命を取られるか、それとも間違いになるか」責めたてられ、神の道を選ぶ。

三ヶ月間、神は彼女を眠らせず、飲まず食わずの修行をさせ、それを終えて神の人となる。この間、カンダーリや夢などを通して神は宮古島の神々の事や神体系の事などを教え、カンカカリヤーとして生きてゆくための基本を与えてくれたと言う。そして数年間の変性意識の自己コントロール訓練とも言える時期を経て、28歳でカンカカリヤーになった。

カンカカリヤーは神の道を開けると、ウクイ（御声）

を発する。N.T.の場合は、カンダーリの最中からウクイが唄われていた。彼女のカンダーリの際、井戸の神が憑依し、「埋めた井戸を掘り起こしてくれなければ成仏できない」と訴え、井戸に関係する人々やサス（神女）たちに井戸を復元しろと唄い続けた。その言葉は、「ハイ、私が悪かった。私が悪かった。ハイこの井の神を、ハイどんな事があっても起こしてくれなければ、私は成仏できません。これだけは確かですよー。頼みますよー。あなた、あなた、…」であり、それを唄い続けた。

カンカカリヤー（神がかり）は、依頼者の判示をするときや神との交信の際に「フツ」あるいは「クチ」と呼ばれる唱え口をするが、これを「カンフツ」（神の口）と言う。村の祭祀でも使い、「ニガイフツ」（願い口）は人によって異なる。カンカカリヤーは唱え口を唱えているうちに神が憑依し、神がかりとなってウクイ（御声）を唄い出す。これは神との交信によって即興的に唄われるが、その音律はユタによって様々で一定していない。

3. ユタと音楽環境

ユタN.T.は、決して神司の家に生まれたわけではなく、家系もユタの血をひく者もない。曾祖父にカンカカリヤーで「トーガニアヤグ」の民謡を作った人がいるが、直接の交流はない。小さい頃、病弱で高熱を出して発作を出すことが度々あったが、カンカカリヤーの家を訪ねると治ったという。そのためか、神様に供え物をしたり、家での儀式や村の祭祀等、神事に興味を持っていた。

カンカカリヤーは依頼客の判示を行う際、神との交信の唱え口と呼ばれる唄にのせて祈りをする。唱え口を唱えているうちに神が憑依し、神の声「御声」を発する。この時、神の声は独特なメロディーによって唄われる。そのメロディーは即興的なもので、依頼者の願いやその場の状況に応じて変化するが、基本的な音構造は変わらない。

ユタN.T.の場合は、古くから伝わる「ニーリ」と呼ばれる唄の音構造に似ており、リズムは宮古島特有の言語アクセントによってきざまれ、その抑揚と共に唄われる唄の構造は、一般的にヨナヌキ音階である。この音階

楽譜 1

ウスクダラ

採譜 関 鼎
採詞 本多賀文

ウスクダラ ギーデーラヤン イルビエラヤ ムル
 ギーデーラ ギーデーラヤン イルビエラヤ ムル

はハ長調の第4音と第7音をぬいたドレミソラドの五音音階で、琉球音階の特徴的な音階構造のドミファソシドという、第2音、第6音を抜いたものと異なっている。

沖縄の音楽は琉球王朝に代表されるこの琉球音階が主流と思われがちだが、沖縄本島は、もちろんのこと、八重山諸島、与那国島、宮古諸島、慶良間諸島、大東諸島、本土からの地理的影響と琉球王朝の影響を離れて、島独自の習慣、風俗を背景にした民族のルーツともいえる音楽間隔が各々に受け継がれている。

ユタN.T.にとって音楽はとても重要な役目を果たしており、神の御声を聞く際、唱え口から始まり、依頼客の拝みに応じて、神の託宣を受けるにも音楽にのせて、神の意志を聞き、唄う。その時、唄われる唄とはどのようなものか。ユタが何時、何処でその音楽を身につけたのか大変興味がある。それをカンダーリ、カンカカリヤ一の時、神が教えてくれたものとして捉え、神秘のベールに包むだけではすまされない。それを調べることは、音楽の持つ根源的な作用を知ることにもなり、ユタがいかにしてその音楽を活用し、依頼者の願いを神に伝え、また神の御声を聞くのか、そのメカニズムを知るのに役立つ。特に疑問なのは、カンダーリの最中に唄い踊った曲と神から聞く「御声」の曲では異なっており、ただそれが音楽のメロディーが少し違ふとかリズムが違ふといったものではなく、根本的に音構造が異なっていること

である。

幼い頃から、家に入出入りするユタの唄や、神事に関わる儀式的歌を聴いて育ったとはいえ、自分がユタになるうと思つて覚えたり、特別学習させられたせすに身につけるためには、相当の訓練と時間が必要となる。神の御声を聞くことのできる特別の能力を持つユタは、どのよ

楽譜 2

なり山あやぐ (元うた)

サヨ - な - り - や - ま - ー - や - ー - なり - てい - め - な - り - や
 サヨ - なり - や - ま - ン - か - い - す - い - なり - ぶり - さ - ま - ず - な
 サヨ - め - ま - め - か - ぎ - さ - や - あか - ま - だ - か - ぎ - ー
 サヨ - め - ま - ん - め - ら - ば - たす - な - ゆ - ち - ゅ - す - な

- ま - す - み - や - ま - や - す - み - て - め - す - み - や
 - ま - す - み - や - ま - ン - か - い - す - い - す - み - ぶ - り - さ - ま - ず - な
 - さ - み - や - ら - び - か - ぎ - さ - や - し - し - ち - は - ち - め - く
 - ま - み - や - ら - び - が - や - い - き - く - く - る - ち - ゅ - す - な

楽譜 3

東里真中

あが - ズ - ざ - と - ン - な - かん - よ - ー - ニ - ー - ー - ー
 や - び - る - ん - あ - ー - と - い - よ - ー - ー - ー - ー
 や - び - る - ん - あ - ー - と - い - よ - ー - ー - ー - ー
 ふ - り - む - ん - い - び - わ - し - よ - ー - ー - ー - ー
 い - び - わ - し - ん - ゆ - め - り - ん - よ - ー - ー - ー - ー
 ばん - が - ま - り - み - り - ー - ば - ー - ー - ー - ー
 び - と - が - た - き - な - り - ー - い - ば - よ - ー - ー - ー - ー

か - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー
 と - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー
 か - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー
 わ - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー
 だ - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー
 ば - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー
 い - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー - ー

うな音環境で育ち、音楽と関わってきたのかを調べることによって、ユタと音楽の関わりが解明できるのではないか。

調査を続けていくうち、予想外の事がわかった。ユタ N.T. がカミダリーの時に唄った曲が、トルコ民謡の「ウスクダラ」(譜例 1)であり、日本の音楽ではなかったこと。神の声を聞き、唄う時のウクイは宮古の古い民謡「なり山あやぐ」「東里真中」(譜例 2、3)と同じ音階構造を持つ、ヨナヌキ音階で唄われること。決して、琉球音階ではないことである。曾祖父が作った「トーガニアヤグ」(譜例 4)の民謡は琉球音階で作られている点からも、血筋や年代、地域とも関係がない。

なぜウスクダラの音楽を知っているのか、何処で覚えたのかもユタ自身は知らなかった。しかし、年代的には終戦後に流行した曲であり、ちょうどラジオ放送が盛んな頃で、ユタ N.T. が 5 歳から 7 歳になるときであった。

離島の宮古島では、沖縄本島からの放送が電波事情により直接聞けなかったため、東京で電気技術を学んだ友

利氏の経営する宮古島の電気屋「友利商会」が受信した沖縄放送に、ローカルニュースを加えて、立き木や電柱に配線を施し、各家庭の加入者に親子ラジオという有線放送で音楽やニュースを毎日流していた。

外の世界を伝えるこのラジオ放送は、感受性が強く、サーダカウマリ(性高生まれ)と呼ばれるユタ N.T. にとっては、とても刺激的であったと想像できる。朝の目覚めは「コケッコウ」のにわとりの声と「デンサー節」(譜例 5)を流す。この生活化した音楽こそ、少女期のユタ N.T. にとって大きな影響を与え、音楽教育にも似た音感教育が自然に行われたと考えられる。

日々の生活と結び付いたラジオ放送、そして流れる音楽は、外界の世界を教えられるだけでなく、内界にも強く印象づけられ、それが自己表現、表出を行う際にも大きく作用した。事実、覚えた曲にのせて、即興的に歌を作り変えて歌うのがとても上手であった。この無意識に歌を作って歌うことができる能力こそ、神の御声を聞く際に最も有効に働いたといえる。

このラジオ放送で流された「デンサー節」こそ、宮古島に古くからある歌と共通した音階構造を持ち、ユタ N.

楽譜 4 とうがにあやぐ

うぶゆー ていら しづ まいだーだきー
はるぬー でいー くぬ ぼなぬーにんー
としかゆー かーぬー うつキーだきー
くがにー ぜん ぞぬ うぶやーまいー

くーにぬーくにーくにす まぬ すまーずまー
ろーくぬーあやーくやすに ずまいちぬーにぬー
しづーくーにーつーめーユー
やぎーたーん つきーん ていた らぬ やまーまいー

ていりーがーりー うちーいーよ
あていーかーぎーかーりーよ
うつーキーぬーにーんーよ
くらーびーや ならーんーよ

ぼがやーく み うしづーがーゆーやー
うやぐにーがぬ まい すむーずまーがみーまいー
あがズーかぎーぬーゆズーかーぎー
ふおたかーら どり なしーおらーたかーら どり

にびーしどろ だーらーよ
とろゆーまし ちぬーでいーよ
くぬーにぬーやーんーなよ
くぬーゆぬ たーかーらよ

楽譜 5 くデンサー節

《前奏》 《テマ》

《間奏》

形譜：マフツレゴト 125-2

饑世賦子 符選 4

採譜：若島

アカシヤの雨がやむとき

(昭・35)

水木かおる 作詞
藤原秀行 作曲
西田佐知子 歌

アカシヤのあめにうたれて このまま -
- しん で し ま い た い よ が あ け る -
ひ が - の ぼ る あさのひかりの その なか で
つめ た く な っ た わたしを み つ け て あ の ひ と は -
な み だ を - な が し て - く れ る で し ょ う か

アカシヤの雨にうたれて
このまま死んでしまいたい
夜があける 日がのぼる
朝の光のその中で
冷たくなった
わたしをみつけて
あの人は
涙を流して
くれるでしょうか
アカシヤの雨に泣いてる
切ない胸はわかるまい
思い出のペンダント
白い真珠のこの肌で
淋しく今日も
あたためてるのに
あの人は
冷たい瞳をして
何処かへ消えた

Tの身体化した音楽の特徴を示している。彼女の好きな曲は、西田佐知子が歌ってヒットした「アカシヤの雨が止む時」(譜例6)で、カラオケでも歌うほどである。

もう一つの疑問でもあるカンダラーリの時に歌い踊った曲、「ウスクダラー」はどこで覚えたのかについても、このラジオ放送が解明してくれた。

1952年、アメリカのポピュラー歌手、アーサー・キッドが、ブロードウェイのミュージカルで歌ったものが全世界にヒットし、日本でも江利チエミがアラビア風の歌詞で異国情緒たっぷりに歌い、それがラジオ放送を通じて日本全国に流れた。その音楽のリズムは踊りを誘い、音構造もシンプルで、イ短調のラシドレミファミレドシラの上行・下行音階に、2拍子・4拍子の単純な♪♪♪♪のリズムが加わる。この音楽には人々の心を捉える要素があり、日本ではチンドン屋が日本的なリズムにのせて街を流し、流行した。

この音楽は、ユタN.T.にとっても情動に深く結びつく音楽として記憶され、身体動作を導く心地よいリズム感が、トランス状態になったとき、自己表出、自己回復させる役目を果たした。急性精神病といえるカンダラーリ時に、自己を守る自我防衛機能と自己回復機能が働くのを助けるのも、この音楽の作用によるものであり、その機能を身につけた者にこそ、ユタ(シャーマン)になる資格があるといえる。

これらの音楽の性質と特性を本能的に活用しつつ使い分け、変性意識状態をコントロールして神の御声を聞き、それを伝える方法は、少女期から無意識に聞き覚えたラジオから流れる音楽が、大きく関与していたことがわかる。しかし、ユタ自身の感受性や個人の特性が音楽との結び付きを決定付けており、神の御声を聞くとき同じ兄弟であっても、同じ音楽を使わない。事実、5歳以下の弟もユタであるが、N.T.と同じ唱え口、御声を発することはない。

4. ユタの治癒力と生理的反応

シャーマンとしてのユタは、深い人生の苦しみの体験を基本に、人の苦しみを自分の苦しみにとして感じる体質を、カミダラーリの時に身につける。この方法は、音楽療法を行う時とも似ており、言語による理解ではなく、音楽によって直接体に伝え、感応し合う感性伝達システムを利用しているといえる。

通常では理解できない不思議な体験を通して、依頼客の問題解決の方法や助言を神の御声によって伝えることは、人を助けることであるだけでなく、自分自身、神との絆を強め、より自分を高めてゆく行為でもある。そのためか、夢に見た人物や出来事、幻聴や幻視等、身体的反応を引き起こす全てを神からのメッセージとして受け取り、それを解くことが務めであると、ユタは考えている。人を癒すことが自分を癒すことになっている。特に、自分の力でカミダラーリから自己を回復させたと考えているN.T.はその傾向が強く、夢を判じることによって様々な問題を解決してきた。N.T.の話の聞いていると、過去ー現在ー未来の時制がすべて現在形で語られ、時間や空間

の概念が取り去られてゆく。

依頼客の話聞き、悩みごとの関係者の名前、生年月日、住所、生まれた時間を確かめ、神棚に向かい、線香を立て、おもむろに唄を唄い出す(譜例7)。この時、彼女は両手で膝を叩きながら、神との交信のためにニガイフツ(願イ口)を唄う。歌詞は依頼者のつど変わり、宮古の言葉で即興的に唄われ、いつしか神の御声が現れる。この時、唄われるメロディーは、宮古の古い民謡の音階構造でできた曲であり、そのリズムを右手で2つ、左で1つ、上下に首を揺すりながら膝を叩く。これが左右の脳に伝わる刺激に差異を生み出す。

この時の脳の変化を、東京電気大学の町好雄教授が測定した結果、次のことが解った。唄が始まると、左前頭葉の活動が低下する。依頼者の感情の高まりに呼応して、ユタN.T.の唄の調子も高まる。目からは涙が流れる。唄い出して30秒ほどでこの現象が現れ、右半球の前頭葉の活動を示すベータ波が強くなり、唄の調子が高まるにつれて、ベータ波はピークに達する。御声を聞いているときは、右半球の前頭葉がはっきり優位であることが解った。音楽によって変化したと考えるのが普通だが、驚いたことに唄が終わった後、劇的に高まり、神の言葉を告げる何分間の間中高まりは続いた。

これは、イメージや空間判断力を司る集合的無意識の活性化が行われていることを意味しており、逆に、左半

球の前頭葉の沈静化が行われているとも解釈できる。この生理反応を考察してみると、ユタと依頼客との空間的、情緒的共有状態が問題となる。

すなわち、依頼者の心身状態に感応し、情動を深く突き動かす音楽にのせて、時空を越えて問題を捉え、神の御声を聞き、それを唄にして伝える。この時、脳を刺激するものは、神棚にある線香の香りと守護神の顔、右手2つ、左手1つのリズムに自ら唄う唄。味覚以外の感覚(嗅覚、視覚、触覚、聴覚)であり、それを総動員して願イ事を行っているといえる。

この統合された規則的祈りの方法が、カミダーリをコントロールし、必要な神の御声を聞く脳の状態を作り出しているといえる。左前頭葉の沈黙のうちに神の御声が発せられるのも、言語認識を越えた無意識のレベルにまで降りて依頼者の悩みの原因を感じ取り、その解決法を見つけ出しているといえ、この変性意識を自由にコントロールする能力こそ、人を癒す力になっており、音楽は変性意識状態に導き、依頼者と感応し合い、共感、共有世界を生み出す役割を担っているといえる。

すなわち、『音楽は無意識に身につき、無意識に口ずさみ、無意識に人間の情動を動かす。この作用こそが、ユタの治癒力を生み出す原動力になっており、問題解決に必要な本質的行動を感知させ、それを神の御声として音楽にのせて伝える。人間の意識的操作によって言語化された場合には、このような脳波の発生がないことから考えても、それが伺い知れる。』

5. ユタの儀式(願イ)と音楽療法の共通性

宮古島のユタは民間心理療法家として機能しているが、沖縄文化圏全般にみて、依頼者も含め祖先崇拜による信仰神が治療の核になっている。沖縄文化を象徴するものとして、トートーメ(位牌)とヒヌカン(火の神)があり、人々はそれを尊ぶ習慣がある。様々な災いや病気等、原因不明の出来事を解決または解明する際に、これをウガン(御願)する。

また、病気や災いの再発に対しては、ニンヌミグイ(年の廻り)と受けとり御願を継続する。その際、現在にい

楽譜 7

御声(ウクイ) N.T.

The image shows a musical score for a piece titled '御声(ウクイ) N.T.'. The score is written on a single staff with a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The time signature is 2/4. The melody consists of a series of eighth and sixteenth notes, with some rests. The score is presented on a grid background. At the bottom right of the score, the name '採譜 野田 煉' is written.

たる先祖の系図をさかのぼってシジタダシ（筋を正し）を行うことで災いを排除する。これを作法にしたがって手助けをするのがユタであり、神の御声を聞き、問題を明かし、依頼者が平安になるように努める、職業的心理療法家である。

従って、宮古の地域性、社会構造と精神文化を含む生活空間を共有する者同志が、深く理解し合える関係でなければ治療効果はうすい。しかし、神の御声を聞くべく唄われる唄、特に単純なリズム打ちを基盤に、音楽的にも優れたパフォーマンスでもある、ヨナヌキ音階で唄われる旋律は、人の心を安らかにさせる働きがあり、唱えられる言葉は解らないにしても、感性言語とも言い替えられる、たおやかな音楽が、依頼者とユタの共有空間を創り上げ、ユタ自身が背後に座る依頼者と、ある種の精神感応現象を起こし、依頼者にしか知りえない秘密の事柄を感知したり、捕らわれている内容について探り出す。この二者の関係を見守るもう一つの目を、ユタは持ち、そこに見たものを言語化し、神の言葉として感じ取る能力を有していることが、ユタの条件である。この能力を持ち得たのは、小さい時からの生活環境と、その子自身の性格と興味、好奇心が大きく関係するが、苦勞、苦難、不幸等、様々な障害を実際に経験してきたからこそ、他者の気持ちを理解でき、共感を持って接することができる。ある意味で、人を助けることに生きがいを感じる人でなければ、努まらない。天の声を人に伝え、より良い生活が営めるようにと考える者にしか、この道を生きることはできないといえる。

神の使者としてのユタは、感性調整装置とでもいう音楽を使い、人と人をつなぎ合わせ、人間の無意識世界に入り込む。その行為は、依頼者の本質的な悩みの原因として、または直感として第三の目で見透かし、それを神の言葉として御声の音楽にのせて告げる。夢として意識した視覚現象はユタの脳内で想起され、それを言語化する行為は、専門的な訓練が必要である。そのため、日々に見る夢を判断分析するのが日常の生活習慣となっており、これはユングやフロイトの心理分析にも通じる。

しかし、何よりも重要なことは、いかにして神の御声を聞き取れる境地に入るのか、いかにしてその神の御声

を現実の世界に導き出すのか、である。そこに、絶対必要条件として、音楽が存在する。その音楽を身体化し、時空を越えて行き来する意識操作装置として開発したのが、ユタといえる。

心理療法家としてならば、カウンセリングによって患者を分析する力が必要である。占い師は、星や太陽や暦であり、生年月日であり、家族関係等の情報と依頼者の顔つき、動作等によって占う。精神分析医は、患者の症状や言動を見て判断し、薬を処方する。音楽療法家は、音楽を通して患者との共有、共感世界を体験し、情動の深い部分から問題の所在と、それを癒す神経系を活性化し、自然治癒のエネルギーを高め、人との結び付きを強める。

これらの特性を考慮すると、ユタの行う儀式は、音楽療法と同じ性格を持つものと捉えられる。すなわち、情動の深いレベルを依頼者と共に感じ、共有する世界を再現し、そこからの脱却のために必要な天の声、神の声を聞き出す。その声が聞けるのはユタだけだが、言語理解を越えた感性による認識が、願いの最中に唄われる唄によって依頼者にもできており、それをユタが言語化して、依頼者に神の声として伝える。それゆえ、依頼者は納得する。

しかし、願い事や悩み事を、依頼者本人が参加せずにユタにお願いした場合、依頼者は決して納得することはない。なぜなら、感応、感知し合う共有体験を通して問題を知ることができ、ユタの言葉を無意識に受け入れてしまう感性体験こそが、この治療の最大のポイントであるからである。

すなわち、言語化以前に、感性レベルで理解することこそ、治癒的効果を期待できるため、共有、共感を必須条件とする。ユタの儀式（願い）と音楽療法には、共通性があるといえる。

おわりに

ユタは、自己の変性意識状態を音楽によってコントロールするだけでなく、依頼客の置かれた状況や、根本的な問題を無意識に感じとるために音楽を使う。

なぜなら、人と人とを感応させ、共有、共感を与える音楽が集会的無意識状態を作り出し、その時、ユタは神のおつげとして感じる、または、見えるものをウクイ(御声)として唄う歌にのせて発する。願イを行っている間に想起される様々な事柄と、夢のように映し出されるイメージ世界を秩序だて、依頼客の知りたい事や問題解決の方法を導き出している。

この特殊能力を得るには、肉体的、精神的極限状態としてのカミダリー経験が必要不可欠であり、そこに音楽が介在する。音楽は人を癒し、勇気づけ、生きる希望と糧を与えるが、依頼者のためだけでなく、自分にとっても生きる力を得るのに必要である。

宮古島の世界を共有する者はもちろん、別の世界に住む人々にとっても、ユタの民間心理療法家としての重要性がある。

ユタの治療方法は、人の無意識的世界にも降り立ち、障いある原因を見つけだし、それを神の御声として聞き、告げるが、この能力は、特別の者だけにしか与えられず、ある種の天才芸術家に近い素質のある者にしか、身につけることができない。ユタは、あらゆる感覚器を研ぎ澄ませ、第三の目ともいえる神の視座からユタと依頼者を見つめ、それぞれのコンパスを重ね合わせることによって、その問題となる焦点を見定め、解決の方法を神から啓示され、その言葉を音楽にのせて伝える(図2)。

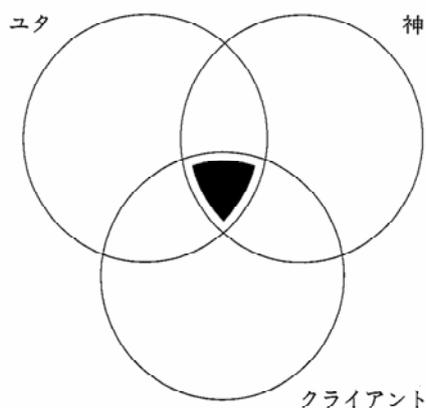


図2 ユタと神とクライアントの接点

すなわち、身体化された音楽の働きによって、無意識世界に到達し、そこで感知した情報を再び音楽にのせて音声化する。それが、ユタの治療治癒行為といえる。

参考文献

1. シャーマニズムの世界, 桜井徳太郎: 春秋社. 1989. 1. 10
2. 続 びるます話, 佐渡山安公: かたりべ出版. 1996. 11. 10
3. 驚異の小宇宙・人体II「脳と心」—果てしなき脳宇宙: 日本放送出版教会. 1994. 4. 10
4. 驚異の小宇宙・人体II「脳と心」—無意識と創造性: 日本放送出版教会. 1994. 4. 10
5. アジア諸民族の民話, 関鼎: 音楽之友社. S53. 12. 10
6. 宮古のあやぐ, 富浜定吉: 文教図書. 1990. 11
7. マブイとユタの世界—琉球文化の精神分析, 又吉正治: 月刊沖縄社. 1993. 4. 1

註

- (1) シャーマニズムの世界 桜井徳太郎編
南アジアのシャーマニズム 佐々木宏幹p.49(16-17)
- (2) 同上p.50(4)
- (3) シャーマニズムの世界 桜井徳太郎編
- (4) シャーマニズムをめぐる諸説 桜井徳太郎編p.18(15)~p.19(4)
同上p.22(8-14)

図1 シャーマニック・トランスの構造
p.34 ユタ成巫過程のパターン

図2 ユタと神とクライアントの接点 野田作図

- 楽譜1 アジア諸民族の民謡 関鼎 音楽の友社 p.22
- 2 五線語 宮古のあやぐ 富浜定吉 文教図書 p.138
 - 3 同上 p.23
 - 4 同上 p.1
 - 5 マルフクレコード F2S-2 饒辺勝子特選集
 - 6 日本の歌謡曲 全音楽出版社 p.228
 - 7 宮古島ユタの御声録音物からの採譜 野田療